山と花のたより　134号

２０１１年５月２３日　松尾

メールアドレス　tadashi6414@smile.ocn.ne.jp

4ヶ月ぶりの再発行です。

前号では金剛山の雪中登山を載せましたが、今、山ではササユリが蕾を膨らませています。日課としていた二上山登山をも自粛して力を傾注したいっせい地方選挙は４月２４日に終わったのですが、なぜか文章を書く意欲が湧かず、４ヶ月ぶりの再発行となりました。拙文をお読みいただいている方々に、また押し付けがましく送らせてもらいますが、ご一読いただければ幸いに思います。

ギンリョウソウ（熊野古道果無越）

野山の不思議　⑭　　星形の湿度計＝ツチグリ

《この項と次の項は健生会友の会機関誌「ふれあい広場」に掲載してもらったものですが、同誌編集部の了解を得て、ここに転載させていただきます》

秋から冬にかけて、野山を歩いていると写真の丸い球形のものが道端の崖やその下の道に転がっていたりします。これはキノコの仲間のツチグリです。「地中から出てくる栗の実」の意でしょうか。

私が判別できるわずかなキノコの一つで、注意しさえすれば二上山でもたくさん見ることが出来ます。この丸い袋の中には胞子が入っていて、地中では外皮に包まれていますが、地上に出てくると外皮が開いて写真のようになります。

ツチグリ（二上山で）

この外皮の内側には白地に茶色のひびが無数に走り、ちょうど陶磁器の貫乳(かんにゅう)に似て、思わず見惚れてしまいます。

そしてこの外皮が外気の湿度を敏感に感じ取って開閉するのです。湿度が高ければ開き、低ければ閉じて球形の袋を圧迫して胞子を噴出させるのです。不思議ですよね。

この不思議な働きをとらえて、ラテン語の学名は「星形の湿度計」という意味だそうです。しゃれたネーミングですね。

ちなみに私の手元の「きのこ図鑑」では「不食」とされていますが、地中にある「幼菌」は食べられて、美味しいそうです。食べた経験のある方、採り方、食べ方をお教え下さい。

野山の不思議 ⑮　ハリガネムシの怪

ハリガネムシは文字通り、細長い針金のような生き物で、バッタやカマキリに寄生します。幼少の頃、腕白少年がカマキリを踏みつけて黒いハリガネムシを体外に出し、そのハリガネムシが地上でのたうつのを見た経験は何度もありますが、「数倍もの体長をもつ生物が小さなカマキリに寄生している」事自体が、大変不思議でした。

二上山の登山口にある祐泉寺の横を谷川が流れていますが、秋、この川の澱みの中で、ハリガネムシがうごめいているのを見ることが出来ます。そうです、ハリガネムシは水生動物なのです。水の中の生物が、陸上生物のカマキリ等に寄生する！　謎は深まります。

研究者たちの報告によると、ハリガネムシの幼虫が水生昆虫の体内に入り、その昆虫を捕食したカマキリの体内で寄生生活に入ると言うのです。ここまでのルートだけでも素人の私には、偶発的事象が重なって成り立つ話だと思えてしまいますが、さらにカマキリから水の中に戻るルートはと、考えると頭を抱えてしまいます。

これも研究者の報告に依るのですが、カマキリの体内で成長したハリガネムシがカマキリを水辺に「誘導」し、カマキリの身体が水に触れた時に脱出して水中生活に戻るそうです。ハリガネムシのこの生活サイクルは多くの観察や実験で確かめられた事実なのですが、私には謎が倍増どころか、二乗、三乗にもなる感じなのです。

この「ハリガネムシの怪」をどなたか、解明していただけませんか。無責任な書き方ですみません。

爽やかだった十津川の山々　　土庫病院友の会山歩きクラブの例会登山

土庫病院友の会山歩きクラブの例会登山で十津川村の山々に登りました。5 月 18 日早朝に高田市を出発、日本 100 名瀑に選ばれている笹の滝では、水煙を浴びながら豪快な滝を見物。21 世紀の森公園で多彩・多様なシャクナゲの中を歩き、カルミアの花を教えてもらいました。

玉置山山頂でホンシャクナゲの気品ある美しさに感嘆し、十津川村在住の岡渕元中学校校長の案内で玉置神社を見学しました。県内一とされる大杉、風格ある神代杉や夫婦杉、何時見ても何百年の風雪に耐えてきた姿に心奪われます。その後平谷の十津川温泉で一泊。

翌 19 日は果無（はてなし）集落から、世界遺産となった熊野古道・小辺路（こへち）を辿って果無峠に登り、果無山脈を西に歩いて石地力山に。

弁当をひろげながら緑眩しい山々を眺め、花を楽しみました。往きには蕾だったキンランが帰りには開いていて、祝福された気分でした。